

---

# あ わ い

維月十夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あわい

### 【Zコード】

N4785A

### 【作者名】

維月十夜

### 【あらすじ】

【云つてはいけないよ、話してはいけないよ】それは、幼い頃、少年が彼らと交わした【契約】。しかし、やがてそれは覆されることになる。旅の祓い師として生きる半妖の青年・カイリ。カイリはひつそりと、現代を生き抜く妖の元を廻る旅を続けていた。今日も、カイリの旅は続く。

## プロローグ（前書き）

こんばんわ、維月です。

新連載『あわい』のお届けにあがりました。

以前から、書き続けていた和物の小説ですが、ストーリーがちょっと変。（Ｔ＿Ｔ）

気に入つていただけると、幸いですが。（笑）

それでは。

## プロローグ

云つてはいけないよ。  
話してはいけないよ。

それは、お前と我らを繋ぐ【契約】だからね。

【いいかい、我らのこと……人には話すでないよ。文字にしてもいけない】

【わかった、分かったよ……】

汗ばんだ掌を握りしめて、後ずさる少年。

【もし、その時は……お前を殺しに行くからね  
闇に浮かぶ、無数の異形の目が<sup>び</sup>犇めぐ。  
幼かつた俺は、一步間違えれば発狂してしまいそうな殺氣を押しつけられて、恐々と頷いた。

その時は、どうする手立てもなかつたから、ただ頷く」としかできなかつたんだ。  
だが今は違う。

扱い方を学び、こちら側から新たに【契約】を結び直したのである。  
だから、昔のように奴らに怯えて暮らすことももう  
ない。

昔

俺は祓い師だった父の後を継ぐため、九つの春に、  
奴らと【契約】をした。  
【ヒンジュ…その子かえ？ お前の跡取りといつのは

闇が、喋つた。

その時俺は父に連れられて、ただただ真暗い…夜の闇の中にいた。汗ばんだ手で、父の衣の裾を、咄嗟に握りしめる。深闇の中で 確かに何もない筈なのに、なのに、そこに鋭利な『なにか』を感じたのだ。

いや、それはもう、存在感とこうものだらう。

『さうだ……お前たちの新しい主だよ。しっかり護り、仕えてやつてくれ』

蟠る闇に向かつて、柔軟に笑つた父親に、俺はしがみついていた。

『父上、誰と話してんんだよ!』

『カイリ、闇を、よく見てみるんだ……。彼らはそこにある』

よく見るのだと、カイリ  
見えるはずだ。

『へ、言靈… うああつ…』

耳鳴りが、五体を引き裂いていくようだ。

髪を搔きむしってのたうつた後、カイリの肩がひとつしきり痙攣する。頭の中身が、透明になつた気がした。

そして、俺は奴らの姿を、はつきりと見たのだった。

【まあ、よからう。これより代替えの儀を行つ。Hンジュ…これがどういう事か、お主も分かるだろ?】

主が生あるうちに代替えを行う場合は 使役した異形

に、その身を喰らわせるのが通例となつてゐるのだ。

『ああ……この子を、頼む』

『父上?』

所用に出かける時と同じ顔で微笑つた父に、俺はその時…言い得ぬ不安を覚えた。

『どこ行くんだつ、父上! 離してくれつ、離せ、離せえ  
つ』

異形のとんでもない力に押さえつけられるつひ、いつの間にかに父は、そこから姿を消していた。

『お前らつ、父上をどこにやつたんだつ! ? 答えろよ…』

突如ゆるんだ異形の力に、カイリは機敏に身を翻す。

『やめるつ、なつ、なにするんだつ』

闇の中、凍つたよつた紺碧の瞳が、ビヒか優しげに細められたのを理解して、彼は抵抗をやめた。

ぐい、と闇の一部が、彼の頭を掴む。

【お前さん……泣いているのかね? 父が心配か、優しい子…。心配なのは分かるが、これが我らとあ奴の契約でな。致し方ないこともあるんじやよ】

『契約つて…なんなんだよ? 父上は…帰つてくるか? ビヒに行つたんだ?』

闇が、晴れたのか、それとも、自分の田が闇に馴れたのかどうかは分からぬ。

そこには、豊かな黒髪を背に流した女性が、真つ直ぐにこちらを見返しているのが見えた。

【……もうあなたの父は戻らぬ。さあ、我らも仕上げとこ! うか…】

『なつ、なんだよ…くるな、来るなあつ! …』

ひやり、と冷たい手が触れて、再びカイリの思考は凍結する。

【契約の証に、おぬしの左目を貰つよ】

父は、強い術者だつた。

だつた

。

開祖として一門を拓き、一族を一欠けも離反者を出すことなく支える、凡てにおいて秀でた人間だった。  
少なくとも、俺はそう思っていた。  
だが……。

父は死んだ。

方々を探しまわった挙げ句……俺が父の亡骸に辿り着いたのは、それから一月あまりが過ぎた頃だった。  
着衣はそのまま。父は、奴らに喰い殺されていた。  
山間の小さな泉で、きれいな白骨になっているのを見つけたのだ。  
カイリの青い隻眼から、涙が溢れては地に落ちる。

父上、あなたは凄い。

そして、愚かだ。

人間は、欲深き生き物。その身一つでは生きてゆけぬ者。

命を対価に、まつろわぬ者を操る。

なにかに頼らねば生きていけないのなら、捨ててしまおう。

人間としての時も、考えも。

自分は、もう人間をしていきたくない。

『父上……済まない、俺は、もう人間をやめてしまったよ』

父の墓を作った後、カイリは一度と一族には戻らなかつた。

龍ヶ淵 りゅうがぶち（前書き）

幼い頃、人としての生に絶望した青年・カイリ。

カイリは、妖を従え、それらを祓う『祓い師』を生業に旅を続けて  
いる。

現代を生き抜く妖たちの元を廻りゆき、カイリの旅は今日もまた続  
く。

## 龍ヶ淵 りゅうがぶち

灰色に濁んだ空から、無数の針が降る。

水の、針。

身動きするもの凡てを射殺すような豪雨の中を、一人の男が黙々と歩を進めていた。

頭から雨よけのコートを被つて歩く男の表情は、そこからは読みとることができない。

「だめだ、このままじゃあ埒があかねえ」

容赦なく打ち付ける雨に、男は曇天を睨みつけて咳く。

その先に見えた大樹の下で、彼は足を止めた。

「うは、ひでえな」

被っていた上着を脱ぐと、濡れたような射干玉の髪が露わになる。

パキッ……

(ん……?)

「木靈の巣か……悪いが、少し借りりやが」

気配に、彼の青い瞳が樹梢に座っている娘・木靈を見あげた。そこには、緑あおい髪あわをした娘が座っている。

【随分と風変わりな童じやの、お主が噂の祓い師か】

鈴を転がす声が、柔らかく彼の耳朵を打つ。

「俺を知つてんのかい」

【『こちら側』で知らぬ者はいないさ。間に棲まう祓い師どのが】

「間ね、そんな風に伝わつてんのか。まあ、否定はせんがな」

あわい

。

彼の青い瞳が、スッと一瞬細められる。  
人の容姿かたちを保ちながらも、人に在りざりき者。

または妖であり、人間でもある者。

死んでいて、生きている者をいつ。

彼 カイリの瞳が揃いでないのは、そのためである。瞳はあるが、片割れは色も違ひ、見うる物も異なつていた。

「尋ねるが 龍ヶ淵そらつてのはどっちかね？」

【この雨に呼ばれるモノは多い、ここより真北に行けばいいよ。ごらん…水馬そらが行く】

カイリは言われて、白く濶んだ宙を見あげる。

水銀色の一見青く見える髪を振り乱して、水馬が曇天を駆けていく。

「一頭くらい…持つてた方が便利そうだな」

【面白い奴よ、あれを狩るというのかえ？】

こりこりと笑う木靈に、カイリは苦笑い。

しなやかな四肢に、優美な青い髪を持つ馬の姿を持つ妖・水馬。誇り高く、気性が荒い。

その身に巨石をも碎く剛力を潜めているので、何人も忌避するものの一つだ。

「真北だな、ありがとう」

荷を背負い直して、カイリは木靈の樹を離れた。

カイリは、懐から一枚の書簡を取り出す。

通常ならば、水が触れるふやけてしまう紙だが、彼が手にしている書簡には、なんの変化も見受けられなかつた。

書簡の差出人は、恐ろしく達筆な字で『龍ヶ淵』と記されている。

そう、カイリは書簡の差出人である『龍ヶ淵』の主に呼ばれてやつてきたのだ。

(昔と、大分地形が変わった……この辺りも、開発の手が入つてきてんだな)

悠久を生くるカイリたちにとつては、時間など些細なことではないが、問題なのは領域なのである。

カイリがまだ幼かつた500年前に比べて、この辺りの森は急速に姿を消した。

森だけのことではない。棲息する獣・同類の数も減少の途にある。

カイリよ、至急に龍ヶ淵に来い

「まさか、だよな」

しとしと弱まり始めた小糠雨の中、カイリは急ぎ足で、ぬかるんだ山道を登つていった。

カイリは、契約後に人間の時を棄て、この淵の主に育てられたのだ。

「なんともイヤな里帰りだな……ひどく気がが濁つてやがる」「近づくにつれて、濃い死臭を感じる。

腐つた肉と、血の匂い。

まるでこの周囲一帯が、死に包囲されていくようだった。

ぱたつ……ペタ、ペタッ

頬に触れた、ぬるりとした冷たい感触。

それに目は、自然に頭上にかさばつている枝に向く。

「なつ……ー?」

カイリの頬に触れたのは、間違いなく血だった。

そこには、先に見た水馬の首が引っかかっていた。

優美だつた青い髪は、いまや血にじす黒く変色し、哀しげに吹く風に揺れている。

計画性もなく、食いちぎられた首の断面。

おそらく、五体は四方のどこかに散ってしまったのだらう。

「おまえ……」

水馬さえ敵わぬ妖が、この先にいるというのだらうか？  
(ま…さか、まさか！?)

カイリに、ひとしきり嫌な確信が生じた。

母からの書簡。

濃い死臭と、血の匂い。

真北へ向かつた水馬。そして、水馬は死んだ。

真北には、何がある？

「龍ヶ淵……！」

なにかがあったのだ！

カイリは走つた。

「くつ……」

パシャン……と、彼が踏んだのは水溜まりではなかつた。

あかく赤く咲く、夥しい血の海だつた。

鋭く身を斬りつける冷氣の中、カイリはそこに変わり果てた母を見つけた。

【カイリ、よく来たの……妻の、愛しい息子】

「や、やはりつ……斗生つ！」

血に濡れて微笑む彼女の肌は、所々に黒く斑に染まり、毒々しい腐

臭を放っていた。

「斗生つ！？ どうして、こんなになるまで放つておいた！ どうして、もっと早く俺を呼ばなかつたんだ！」

立ちこめる腐臭も厭わずに、カイリは淵の岸に横たわる龍の頭を抱き締めた。

【カイリ……】

青い隻眼を細めて、カイリの養母・斗生はゆるゆると人型に姿を歪ませる。

【カイリ…… もう分かつておるのだ。妾は、もう助からぬ…。これが寿命という物なのだと、やつと分かつたよ。その前に、少しお前の顔が見たくなつた】

弱々しく、悄然と微笑む斗生。

「情けないこと言つんじやねえよ！ いつもみたいに、勝ち氣な斗生はどこ行つた！？ なにか方法くらい見つかるだらつ！」

カイリは、斗生の血で汚れた頬を拭つて怒鳴る。

【お前…… 優しい子…… 昔から、そういうのは変わらぬな】

カイリの脳裏に、一瞬映像がよぎる。

夥しい、血。

涙。

これは既視感だらうか。

(血 ? なんだ、ひつかかる。なんなんだ？！)

『 必ず助けてやる、だから、だから…頑張るんだぞ』

目に、大粒の涙を溜めた斗生。

そういえば… 蝶まれた俺を助けたのは、斗生だ。

『龍の病は、同族にしか癒すことはできぬ…助かつて、よかつた

』

(そりゃ、そりだつたのか！)

カイリは、唐突に理解した。

キーワードは血！

なぜなら、その血には浄化作用があるからだ。

「やうか、血だ！俺の血を使えばいいのかつ」

それならば、この夥しい血の海にも納得がいく。  
斗生は、それに気づいていたのかも知れない。

【……カイリ……？】

カイリは、がりじと掌に牙をたてた。

彼の掌には、たちどころに赤い液体が溜まつてゆく。  
儚い微笑を浮かべる少女に、カイリは掌を差し出した。

「斗生…飲んでくれ。これでいいはずだ」

それに、こくりと頷く斗生。

彼の掌に口づけた彼女の身体が、次第にぼんやりとした光を放ち始める。

それにつれて、彼女の五体を蝕んでいた斑も、跡形もなく消えていった。

【カイリ……思い出したぞ。妾も、昔お前に同じ事をした】

「俺もだよ。助かつてよかつたな」

カイリは、壊れそうなほどに斗生を強く抱き締める。

斗生は、やんわりとカイリの背中を抱きかえしながら、哀しげに呟いた。

【迷惑をかけたな…この者たちの供養、手伝ってくれるか？】

「……ああ」

斗生を蝕んでいたのは、開発排水による、穢濁あいだく及び穢臍えすいである。

淵の穢濁も消え、カイリは再び、母の許を去らんとしていた。

風に舞う桜の花弁が、斗生の黒髪を撫でていく。

沼の端に咲く桜の大樹の傍、二人は寄り添っている。

【まだ、旅を続けるのか？】

「まあな、まだ知ことが多いんでね。もうねえとは思つけど、な

んがあつたらすぐ呼んでくれよ?」

【分かつてゐる】

ひとひら、ひとひらと舞い散る桜が、斗生の美しさを際立たせている。

「ホントかよ」

美貌の二人が寄り添うと、それは恰も、一枚の絵画のようだ。補足だが、この二人…血の繋がった(?)母子である。

【ホント】

にこりと嫣然と微笑み、斗生はカイリの額に甘く口づけた。

「そつか……じゃ、また何かあつたら絶対呼ぶんだぞ、いいな」

【ああ】

「……よし」

カイリ  
人でも、妖もある間に棲まつ『祓い師

不思議なるものを従えて、彼の旅は…今日も続く。

## 月の船（前書き）

人と妖、その【あわい】に棲まう祓い師・カイリ。ある夕暮れに、彼が出逢つたのは人魚の少女・ミナギだつた。恋がしたいと海にいる仲間の元を離れて、一人人間界で暮らしているミナギ、彼女が恋人に選んだのは……！？

## 月の船

【お月さま、お願ひします。 もう少しだけ、あたしに時間をください。あと少しでいいの、あたしを陸にこせで……】

「……ん？ いま、なにか聞こえたようだが」夕陽を背に、カイリが橋を渡らんとした瞬間、微かな声が彼の鼓膜を揺らした。

橋から下を覗き込むカイリ。

夕陽の逆光で曖昧だが、確かにそこには人影が見受けられた。  
どうやら少女のようだ。

「幽かだが……水のモノの匂い？ あの娘からか  
カイリはヒラリ、と橋の欄干を飛び越えて、下の河口に下りていった。

少女からは、濃い潮の香りがした。

「こんな場所に珍しいな。お前さん、人魚だろ」「だれ！？」

少女は、小柄な身を更に小さく縮めて、カイリを睨みつける。  
(思いつきり怪しまれてんな……)

「いや、怪しいモンじゃねえよ。あんたと同じ水の妖だやの」

【ウソよ！ だってあなた……人間の気配がするわつ】

「聞いたことねえか？ あわいに棲む祓い師の話」

【ええ……？】

「別に、知らねえならいいけどさ」

少女はやや暫く訝るようにしてから、唐突に笑顔になつた。

【あなた……あなたがカイリ！？ 想像してたのと、全然違うわつ、もちろん知ってるわよ、有名だもの】

(騒がしいガキンチョだな……)

カイリは、内心溜息をつく。

「やうか。で、さつきはなにしてたんだい？」

【……それは……】

少女の着ている制服が、どこか寂しげに小さくはためく。

【あたしの名前はミナギ……あなたの言うとおりの人魚よ。小さい頃から、人間たちと一緒に暮らすのが夢だったの。けど、夢はやっぱり夢のまま終わってしまうのね】

夕暮れの風が、彼女の色素のない髪を揺めとつていた。

「そんなこたねえよ、夢は叶えるモンだらうが」

真剣に応えたカイリに、水盆はくつくつと楽しげに笑う。

【あなた面白い人ね、夢は叶えるモノだなんて。今まで初めて言われたわ……あたしの周りは、反対するヒトばっかり】

## 孤独

。

彼女から感じる『影』は、だからなのだらうか。

「いまは、幸せか？」

【うん……幸せだったり、不幸なときもあるわ。人間は、毎日がせせこましいから、時が過ぎるのも忘れちゃう】

ふんわりと笑うミナギに、カイリも薄く微笑み返してやつた。

「そうだな、俺たちに比べて、人間はせわしない生き物だ。その生きいでには散りゆく花のごとし」

【でも、花はまた咲くわ?】

なぜかムキになるミナギに、カイリは再度の溜息。なんというか……馬が合わない。

警えるなら、水と油のようなものだ。

「お前たち、人魚によく似てるな。さつき、聞こえてきた……『もっと生きたい』って」

【どうしてなのかな？　あたし、もっと他の女の子みたいに遊びた

いし、恋だつてしてみたい。こんな、あんまりじやない】  
（当たり前だ……）

人魚は、短命な生き物だ。

その寿命は 長くて、半年から一年ほどと聞く。

自らの短命さを嘆かぬ生き物が、どこにしようか。

「ミナギ、月がどうして欠けるか…知ってるか？」

【知ってる。月の満ち欠けと、輪廻は同じだって……知ってるから、だから哀しいの】

もつと、もつと生きたいのに……。

月に願つて、人魚の涙は零と大気に散りらむ。

「なあ、人魚のお前が海から離れて、かなり無理しているようだが…体をこわしてまで、そんなに大切なことなのか？」

【…ねえ、恋つてしたことがある？】

しばしの沈黙の後、ミナギは恥ずかしそうに俯いてから切り出した。

「……は？」

（あ …… 恋、ねえ）

「恋ねえ。大分昔のことなんでな……長く生きるつむじに、そつまつモンはなくなつちまたよ」

【あらあ不粋ね！ あたしは、燃えるような恋がしたいのよー】

ぐつ、と拳を握りしめる彼女を横目に、カイリは遂に肩を落とした。  
「燃えるつて……いつの時代だよー！ まあ、いいけどさ…。体壊さ  
ねえよう上手くやるんだな」

カイリは橋の欄干を身軽に飛び越えると、再びねぐらを探しの散策

に歩き出した。

(つたぐ、つき合つてらんねえ)

カイリは、ヒトと共に過いすことが元より好きではない。  
独立独歩、が彼の信条だ。

簡単に言えば、旅から旅への暮らしなので、関わりが面倒くさくなつたのもあつた。

その時だ。

のろのろとアスファルトの上を行くカイリの背中に、甲高い怒鳴りが体当たりする。

ついでに、ミナギもだ。

【待つて！ 待つてつたら！ 話はまだ終わってないんだけど】

「……おい、危ねえな」

コートの裾を引かれて転びそうになつたカイリは、憎々しげにふんぞり返つているミナギを振り返つて、歩みを止めた。

「終わつてないつて、何がだよ？ いつちは急ぐんだがな。話なら手短してくれ」

【あなたなら見た目もいいし…同じ妖だから、いいわよねー】

ぽけ、と間抜け面になつたカイリに、ミナギはさも楽しそうにまとわりつくる。

「あ。 だから、なんの話だ？」

半分固まつたまま、カイリは頬を染めてまくし立てるミナギに、おそるおそる問つた。

【恋人に、なつて欲しいのよ……人間じゃ、どうせ合わなくて】  
(コイツ、人間にも当たつたのかよ……)

「俺にか」

【あなた以外、誰がいるの?】

「……」

月が 欠けないうちに、早く恋をしなければ。

【ね、いいでしょ？ どうせ……長い間ではないんだから】

夜風に髪を揺られる風色の髪を押さえながら、ミナギはカイリの腕に、  
弱々しくしがみついた。

「分かった……その代わり、その訳、詳しく聞かせて貰うわ」

【ええ】

ミナギは、いまいる地域にある学校で、生徒として暮らしている  
と話してくれた。

容姿も人間と大差ないので、紛れてしまふんだと楽しげに笑う。

「それで、他になにがしたい？」

一瞬の逡巡の後、彼女はとんでもなくありきたりなことを言い始めた。

【そうねえ、一緒に出かけて遊びたいわ。遊園地に行ったり、景色  
のいいところにも行つてみたい】

カイリの眉が、ぴくりと跳ね上がる。

遊園地は、カイリが尤も苦手な場所なのだ。

「ゆ、遊園地か……ふーん」

【カイリ、連れてつてくれるの？】

もう、行く気満々。

瞳を潤ませる彼女に、カイリは無意識にじりじりと後じさつしていく。

「仕方ねえな、じゃ……今度だ。今日はもう無理……」

「ありがとっ！」

「んぶつ！？」

皆まで言い終わらないうちに思いきりキスをされ、カイリは面食ら  
つて口許を拭う。

（ななつ……なんだこのガキは！？ やっぱ苦手つ（怒））

「あ、ねぐら探しそこねちまつた……」

当初の目的を思い出しても、ぽつりと呟いたカイリに、ミナギはまた  
微笑む。

【なら、あたしの棲み家に来ればいいじゃない。丁度この辺なのよ】

「いいのかよ……」

【カイリなら全然オッケー！ セツ、ヒトハシハナ】

「お、おいつ！？」

【気にしない、気にしないつ！】

ズルズルと強引に引きずられていくカイリは、ふと『なぜ女というの』は、どいつもこんなに元気なのかと内心で毒づくと同時に、深く後悔していた。

ミナギの棲み家は、旧家の井戸に通じているという隠れ池だった。落ちついた、ウォーターブルーの水が美しい。

【なにもなくてごめんなさい、お腹、すいてるんじゃない？】

池の底は、人間たちが部屋とよぶ物によく似ている。カバンや雑誌、教科書などが普通に据えられていた。そして、奥には藻と水泡でできた牀台。

「いや、まだ平氣だ」

【……そ。ねえカイリ……甘えてもいい？】

フワリ、と水泡がカイリの頬を掠めた。

「好きにしろよ」

言葉こそ冷たいが、カイリはもう拒まなかつた。ところより、そうすることができなかつたのだ。

透けたウォーターブルーの水の中、彼女の白い手がカイリを引き寄せた。

ふわり、ふわり。

暖かな水が、カイリの心を撫でては包み込む。

何度も泣きそうな瞳にぶつかり、カイリは強く腕に力を込めた。

【龍は優しいのね。本当に、あなたを愛してしまいそう】

「嬉しいものこそ美しい……人魚のことを言つそつだ」

【カイリ、あたしね……ここから、いつも月を見てたわ。月ってキ

レイ、でも残酷よね】

白銀の鱗を閃かせて、水面近くを回遊する彼女は、本性の人魚になつていた。

【そして、月の船になつて……あたしを迎えて来るの。死ぬのは、い

や】

水面から顔を出した彼女の頬を、清しいものが伝いおちる。

【かりそめだつていい……カイリ、あたしを愛して?】

元より、人魚の命は短い。

彼女は陸に上がったせいで、ただでさえ短い命を縮めることになつたのだらう。

泣き疲れて眠つたミナギの髪を撫でながら、カイリはぽつりと呟く。  
「月ど、お前たちは似ているな……欠けては再生を繰り返す」

月の船は、三日月。

この半月が欠けるまで、この哀しい愛を終わらせなければ

【カイリ】

「よく泣くな、お前は」

ミナギの傍で、カイリもゆづくつと瞼をおろした。

池の底で、カイリは眠つていた。

寝返りを打つた刹那、ぐらりと体が落下する。

「なつ！？」

ぐしゃ、と底に潰れた彼は、牀台を恨めしげに睨みつけた。  
(まだ眠いのに……クソ)

「ミナギ……？」

気配の残滓が薄い。

彼女は、大分前にここを出たようだ。

(学校、学校：つと。確かにこの地域にや、一つしかなかつたよな)  
殆ど雑木林に埋もれた池を出て、カイリは歩き出した。

人群れる雜踏を、カイリは行く。

その後ろ姿は、風を背負っていた。

時代の風を。

人の姿を保ちつつも、彼の姿が他に見えることはない。（意識して、姿を現すことも可能）

だが見えなくとも、確かに底に存在しているものだ。  
ミナギの気配を追つて、カイリは道なりに進んでいく。

田は既に傾き、時間帯で言えば、いまは放課後あたりだろう。  
まばらだが、家路につく学徒の姿が見受けられる。  
やがて進むうち、甲高い声援響く校舎が見えてきた。

（気配はここから……）

さくさくと進んでいくカイリ。

校内で何人もの生徒とすれ違つたが、やつぱり誰にもカイリの姿は  
見えていない。

「つーか、水泳部つてのはどっちだ？」

いま彼がいるのは、屋上。

まったくの真逆だ。

ミナギの、人間としての名は土井水凪どい・みなぎという。

「土井先輩、やつぱりすごいなあ……フォルムが凄くキレイ。さす

が大会に選抜されるだけあるよね」

「ねー、スタイルもいいし、なんだか魚みたいだよね」

プールの室内に、水を叩く威勢のいい音が響く。

泳いでいる水凧を、後輩たちの黄色い声が後押しした。

ミナギは、縦横に水の中を躍る。

「それに、凄くターンが早い……ううとうしちゃうわ

「そうよねえー」

そんなような会話を、カイリは監視台の上から聞いていた。  
（「イツ……大会に出るなんて、一言も云つてなかつたが）  
そのうち、活動時間が終わり、後輩たちはバラバラと帰つてゆく。  
それでも、ミナギは泳ぎ続けていた。

月光が、天窓から射して水を銀に染める中、ミナギは大きくジャンプした。

その姿は、まるでイルカのよう。

そうしてゅつくりと水を漕いで、プールサイドに手をつく。

「みな、帰つちまつたぜ？」

【いいの、カイリに見せたかつたから、好都合】

パシャン、と水を打つたのは、もう足ではなく魚類の尾。上半身を乗り出す彼女は、人魚の姿だ。

仄白い乳房が目に痛い。

カイリはやつとの事で、そこから目をそらした。

【用……欠けてきたね】

再び水に潜った彼女が、カイリに手を伸ばした。

「ああ」

たふん…と飛沫をあげて、二人は水底に沈んでいく。

ひとしきりの口づけを終えたミナギは、カイリの腕の中で小さく、本当に小さな声で呟いた。

【こうして……月を見ながら、いつも思うの。迎えなんて、来なければって】

「俺たちだって、いつかは死ぬときが来る。長いか、短いかだけだ」

【不公平よ、そんなの……。いや、そんなのいやよ。もつと……あなたといたい】

カイリは一瞬だけ、金縛りのように固まってしまった。

「お前……」

作り物の恋が、本心に変わつてゆく。

【もつと、あたしが長生きで……もつと早く、あなたに出逢つていればよかつたのに】

その瞳は語つている。

もう、自分に残された時間は、幾らもないことを。

月は欠けて欠けて

もう三田月まで日数はない。

【明日、ここで大会があるわ。カイリ……見てて欲しいの、あなたに】

「お前つ……もう始めから分かつてたのか!? 明日が三田月だとつ【知つてたわ……きっと、一人で終わると思ってた。でも違つたわね、会つてまだ十日しか経つてないのに……短い恋だつて分かつてるのに。あなたを、愛してるの】

だから、死ぬときはあなたの傍にいたい。

「ばかやううう……！」

【帰ろう? 池に】

カイリの頬を、温かなものが伝つ。

水の中で、唯一それだけが、確かな熱を持っていた。

そして、最期の朝がきた。

プールサイドに、水の騒めきと、選手たちの鼓動が<sub>こだま</sub>舒している。コースの三列目には、真剣な目をした水凪がいた。

(これが

あたしの泳ぎおさめ。必ず勝とう!)

水凪は一瞬、観客席にカイリの姿を捜すが、試合開始の審判の声に現実へ引き戻されてしまう。

「各自、位置について

」

パン…!

大気を裂く、破裂音。

いま、幕が切つて落とされた。

試合の緊迫感に、観客は一様に息をのむ。

(カイリ、カイリ……見ている?)

「ああ、ちゃんと見てるさ」

直接頭に響く彼女の思念に、カイリは薄く微笑んだ。

滑るように、水凪は水を舞う。

端瀬を流れる水の如くに他を圧倒した水凪は、最期の勝利を得た。

「優勝、三コース・土井水凪

つ…」

歓声が上がるが、そこに、水凪の姿はない。

もはや、彼女には浮いていられる気力すらなかつたのだ。

ただ、静かに身を任せ、水底に沈むだけだった。

救護班が彼女をタンカへ担いだとき、ミナギは、真っ直ぐにカイリを見ていた。

「ミナギ!？」

(カイリ、連れて行つて? ……あたしを、池に戻して)

「きみ、大丈夫かね!? これから病院に搬送するよ

年かさの救命士が、起きあがった彼女の肩を掴む。

「いいえ、少し眩暈がして……疲れただけですから。」このまま家で

「休みます」

「そうかい？ 誰か身内の方が来ていたら、付き添つてもらつた方がいいよ」

「はい」

ミナギの傍に、カイリの姿を認めて安心したのか、彼は【氣をつけ

て帰りなさい】と皺深い顔を綻ばせて見送つた。

【カイリ……あたし、いまども幸せなの】

池の端で、カイリは瀕死のミナギを支えていた。もう死ぬのにね、と泣き笑いするミナギ。

カイリはなにも言わずに、彼女を抱き続ける。

日が、暮れてゆく。

黄昏が闇に呑まれ、凡てを塗りつぶす闇がくる。

【どうしてって、聞かない…の?】

口を開くたびに、水泡が散つてゆく。

ぱちんぱちんと弾ける泡は、まるで真珠のようだ。

【覚えてる？ あの約束】

「ああ……覚えてるとも」

彼女は言つたのだ。

自分にとって一番の幸せは、愛しい男の腕で命を守ることだ、と。

【また……覚える？】

「覚えるわ、きっとな」

カイリは泣かない。

涙は、彼女を輪廻から外してしまつから。

【嬉し……い】

届いた一條の月光に、彼女の頬が綻んだ。

それは一瞬だけだが、今まで一番、美しい笑みだった。

「だから……恋は好かねえ」

消滅してしまつたミナギの温もりが残る手を握りしめて、カイリは吐き捨てる。

その声は、震えていた。

夜風が、彼の射干玉の髪を乱していく。

「やはり……伝承は守られるのか」

乾いた風が、草原に晩歌を奏でる。

ひとしきり風が撫でた後、もう、そこにカイリの姿はなかつた。

## 円の船（後書き）

いつも、維月です。

『あわい』3部のお届けにあがりました。  
アンデルセン童話の『人魚姫』よろしく消えてしまつたミナギです  
が、ちょっと惜しかつたかな……（汗）

## 廻のじるべに見る夢（漫畫也）

今から60年前、俺はこの竹林でアヤメとこの少女と出合つた……。

冷たい雨に終わる恋物語。

切ない恋物語は、結ばれなかつたからこそ……

いつまでも、輝き続けるのかも知れない。

## 雨のむじりに見る夢は

冷たい雨に終わる恋物語。

切ない恋の物語は、結ばれなかつたからこそ……

いつまでも、輝き続けるのかも知れない。

初夏の、まだ冷たい雨が竹林を叩いていく。  
その、竹林の奥に佇む家が一軒。

静閑な空間には、物音というものが無い。  
いや、あるとすれば  
それは細かな雨が、下生えを踏む  
音だろうか。

無人に思われた家の奥の和室には、老婆が一人横たわっていた。  
雨音に混ざつて、草を踏む音が軽やかな気配を奏でる。  
「きたのかい？」

縁側に首を向けた彼女には、聞こえていた。

「お前さん、今年も来てくれたのかい？ 嬉しいねえ  
見つめる雨の中、人の形をした影が縁側に腰掛ける。

古びた木が、ぎしりと軋んだ。

「ちょっと、気になつただけだ」

荷を降ろして、カイリは布団から起きた老婆の背を振り向いた。

「ちょっと…待つておいでね、茶を淹れるから

よたよたと覚束ない足取りで廊下を行く彼女を見送りながら、カイリは遠い目をして、雨ばかり落とす曇天を見あげる。  
「人は……変わっちゃうんだよな

若いままで止まつた自分と違い、人間はこの世に生を受けて、あ  
つという間に老いきさらばえる。

もし、自分が人間だつたならと考へかけて、カイリは苦笑に口を綻ばせた。

「珍しくセンチだな……」この雨のせいだ

思い出も、なにもかもを時は流してしまつ。

そう、その思いさえも。

今から60年前 俺は、まだ娘だったこの老婆・アヤメ  
とこの竹林で出会つた。

竹林の奥にある池の辺に、押し殺した小さな嗚咽が響いている。  
「父上も母上も、体面ばかり気にしてつ……私つ、家なんか継ぎた  
くないものつ」

少女・アヤメは、本意ではない縁談話に絶望し、見合いの席から逃げてきたのだ。

「でも、どうしましょ……これじゃあ家に帰れないわ。入水するつ  
もりで来たのに、私つたら、なに考へてるのよつ」

『入水してやる』と思巻いていたアヤメだが、ひたひたと揺らぐ水  
に、すっかり怖じ気づいてしまつっていた。それでも震える足先を伸  
ばして、自らを叱咤する。

(バカねつ、死ぬのなんか怖くないのよ！ すぐなんだからつ)

だが、怖い。

やつぱり怖い。

ざわり、と意味ありげに竹林を揺らす風。  
それ一つでさえも、彼女の決心を殺いでいく。  
アヤメは遂に、ぺたんと座り込んでしまつた。

ああ、やつぱり自分には無理だ……縁談より何より、死を恐れてる。何て愚かなんだろう私は！

将来さきの不安よりも、死を恐れてるなんて。  
とんだ笑い話ではないか。

進むわけにも、逃げるわけにもいかず。  
ならば、どうすればいいのだろう。  
ざわわ、ざわわと風までもが自分を責める。

「私、帰れない」

ぱたぱたと一つ、涙が乾いた土にシミを作った。  
泣いたところで、状況が変わる訳でないのは分かつているのに。  
それを認められない、自分が憎らしい。  
ここにいれば、じきに見合い相手が探しに来るか、両親が来る。  
(もうイヤ、イヤよ……)  
「どうした、気分でも悪いのか？」  
「きやあっー？」

俯いていたアヤメは背後からの声に、イヤと音つぼごとに飛び上がってしまった。

「心外だな、そんなに驚いたかい」

アヤメは、目の前に現れた風変わりな青年をまじまじと見つめてから、安堵の息をつく。

向かってくる人の気配に、ずっと警戒していたのだから、それも当然といえば当然の反応だ。

「ごめんなさい…私、ちょっと人生に迷つてたのよ」  
「道……？」ああ、人生の方な。してなんだ、入水しようとしている？

カイリは、彼女の裸足を見てから小さく息をついた。

所々、柔肌が擦りむけて赤く血が滲んでいるのが痛々しい。

「だつて……皆勝手なのよ。私まだ自由でいたいのに、早く結婚しろだなんて」

「お前さん、いくつだ？」

目の前の少女がそれ程の年に見えず、カイリは思わず聞いてしまった。

「今年、18になつたばかりよ。同じような子はたくさんいるのに、どうしてあたしだけなのかしら」

アヤメは頬を膨らして、理不尽とばかりに腕組みする。

「ほう……」

（18か、そろは見えねえなあ……）

カイリは延々と続く身の上話に、溜息を交えながら応対していた。

「お針に華道……それにお琴まで！ 花嫁修業とか言って、楽しんではるのは自分たちだけなのよ！」

「非道いな、そりや」

「でしょうー？ ぼやぼや欠伸もできやしない」「

「元気、出たか？」

「ツ、と笑うカイリに、アヤメは『あつ』と口許を隠す。

「えつ？ そ、そうね……そういえば」

「死のうなんて、もう考えんなよ？ 親御さんだつて、説得すれば分かつてくれるさ」

「でもつー！」

「もう帰んな、そろそろ一雨来そうだからなあ……俺はもう行くぜ」瞬間、アヤメは彼に常人にはない不可思議な雰囲気を察して、カイリの袖を引いた。

「ねつ、あなた……名前、聞いてもいいかしら？」

「名前……？ ああ、俺はカイリっていう」

「私はアヤメよ、あの……またここに来るの？」

「さあな、気が向いたらまた来るかもしけん」

もじもじと手を揉みしづつている彼女に、カイリはどこか面倒くさそうに応える。

「カイリは、旅をしているの？ なにか宛があつて？」

「あ、もう、帰れつつてんのに。ああホラ、降つてきた」

「本当に雨ー？ サっきの本当だつたのねー」

「いいから早く行け、濡れるぞー！」

二人揃つて慌てて大樹の木陰に逃げ込むが、大した意味もなく濡れ鼠になつてしまふ。

「黄昏に雨か、ますます陰氣だぜ。ホラ、お前にも見えるか、あれが

「え？」

アヤメはその異様さに、思わず息をのむ。

ねつとりとした生温い風が、頬を撫でた。

薄闇の降りた往来には、人通りはなく。その代わりに往来を行くのは、形のない影や、異形の者ばかりだった。

行列をなして進むのは、妖狐・鬼・天狗・河童・般若・髑髏など。

「声出すなよ？ 通りすぎるとまで息潜めてろ」

小刻みに何度も頷くアヤメに『よし』と言つて、カイリは懷から宝珠を取り出す。

とろりとした青い色の宝珠は、見るからに、触ると心地よさそうな気分を抱かせた。

「カイリ？」

「いいから黙つてろ、奴らに知れたらタダじゃ済まねえからな。水<sup>すい</sup>縛呪<sup>ばくじゆ</sup>、水呪<sup>すいじゆ</sup>！」

彼の投げた宝珠は、アヤメを内へ封じ込めて体積を増す。つまり、アヤメの背丈分だけ宝珠が巨大化したのだ。

堅固な水結界は、完全に彼女の存在を覆い隠していた。

「なにこれ……水の中なのに、私ちゃんと息ができるる」

それに、人間と変わらぬ様子で、町を歩いている異形の者はなんなのだろう。

それらと親しげに話す彼は、一体何者なんだろう。

今時分、旅人なんているのだろうか？

よく考えてみれば、それもおかしな話。

彼女の脳裏に、ある言葉が浮かんだ。

あやかし

陰と陽のあわいから生じし者たち。

人心を惑わし、魂を喰らう。

「カイリ、あなたまさか……」

「こぼ」と水泡が彼女の口から浮かび上がる。

と、ふわりと風が頬を撫でたのを感じ、アヤメは封が解けたのを悟つた。

「もういいぞ、どうした？ 青い顔して」

「カイリ、あなた……もしかして、人間じゃないのかしら？」

カタカタと震える彼女に、カイリは小さく溜息する。

「なんか怖がらせたみたいだな。だが人の姿をしているから『人間』とは限らんものだ。俺は人と妖、その間に棲む者

「だから、雨にも濡れないの？」

雨脚は弱まつたものの、雨はまだ完全に止んではない。  
木陰から離れて佇む彼は、雨の中で浮き上がって見えた。

「そうだ。悪いことは言わねえ、早く帰るといい」

背を向けようとしたカイリに、アヤメは鋭い問いを投げつける。

「女一人で、夜道を行かせるつもりなの？」

肩越しに振り向いた彼女の目は、確かに怒りをその色に顯していた。

「仕方ねえ……送るが、俺は人の家にや入れねえから、入口までだ」

「ありがとう、優しいのね」

「……お前、裏表ありすぎ」

「女って、じつにアヤメなのよ」

「おや、ここにいたかい。お茶が入ったよ」  
アヤメは、庭の大桜の枝に座っていたカイリを見つけて、手招きした。

「雨にあたる、中入つてろよ」

「これくらい、どーつたことないよ。あんたが来るまで動かん」

「仕方ねえ頑固だ。分かつたから中入れ」

傘を掲げて呼ぶ彼女に、ふわりと、少女の面影が重なる。

「あんたは、昔のまんまだ。変わんないねえ」

茶を啜りつつ、しみじみというアヤメだが、その声には寂しさが滲んでいる。

「じついうモンだしな」

「そろそろ、あんたが欠けた魔法が切れる頃だ。憶えてるかい？  
あの約束」

「ああ」

「ねえカイリ、ほんとにおたしにしか見えてないの？」

「らしいな、このとおり……他の奴らは見向きしねえし」

アヤメの部屋の縁側に腰掛け、カイリは団子を頬張っている。

「なんだか嬉しい、秘密の友達みたいで」

「友達？」

嬉しそうに笑うアヤメに、カイリはびいか、意地悪そうな笑みを浮かべた。

「あら、違うの？ 毎日訪ねてくれるのは

「友達か……そうなのかもな」

目元を和ませるカイリに、アヤメは花咲くように笑う。

「そうよ」

「お前、それ強引」

「こいの一つ」

「いいのかよ……。あ、誰か来るぞ？」

不機嫌そうに、自分を呼ぶ声を聞いて、アヤメは慌ててカイリから離れる。

「父上だわつ、か、隠れてカイリ！」

そそくさと、アヤメは奥の部屋にカイリを隠すと『静かにね』と言いつけて出て行つてしまつた。

だが常人には見えないカイリ、こつそりと彼女の後をつけていると驚いた。

ぱちんっ…と鋭い音が大気を引き裂く。

「なつ、なにするのよ！？」

「いい加減にしろ！？ どこまで儂の面目を潰せば気が済むのだつ」  
アヤメは打たれた頬を押さえ、ふんぞり返つている父親を思いきり睨みつけた。

打たれた頬が、痛々しい。

「なにが面目よ！ そんなのあたしには関係ないじゃない！！ 好きでもない男となんて、結婚できる訳ないでしうつ」

「もういい！ この恩知らずつ！？ …… 今日とこいつ今日はもう許さん、どこでも好きな場所に行くがいいつ、今日限りでお前とは縁だ！」

「望むところよつ！」

「お前など、もうじらん！」

「ああそうつ！ じけうそお世話様！！」

歩調荒く部屋を出て行つた彼を見送つて、カイリは蹲つたままのアヤメの腕を引く。

「非道い親がいるもんだ、……立てるか？」

「『めんなさいね…？ みつともない所見せちゃつた。私つて、やつぱりダメな子』」

「気にはすんな。それより、本当にここを出るのか？」

「あんな啖呵きつてしまつたんだもの、そういうしかないわね。いつかこうしようとは思つていたから、案外平氣よ」

カバンに衣服や小物を詰めながら、アヤメは思い詰めたような笑みを浮かべた。

「それが平氣つて顔かよ、バカめ」

「バカで結構よ……でも、もうこの部屋ともお別れなのは寂しい」

カイリは、ここに少女を氣に入つていた。

変な意味にではなくて、本当に一人の人間として氣に入つていた。

「ついてこい……一人では、どうにもならんんだろう？」

「心配してくれるんだ」

「……ちょっと、気になつただけだ」

含みありげな問いに、カイリは背中を向けたまま、撫然と言いかえす。

「うん……」

カイリはアヤメを連れて、各地を転々と廻つて歩いた。

桜降る小道や、炎天下の海岸など。

共に風雨に耐えながら、あつという間に時が

季節が廻

つた。

「また、ここに戻つて来ちやつた。ねえ、どうして？」

アヤメは、カイリの袖を引いて訴える。

ここには、戻りたくない、と。

涼やかな風が竹林と、もつ腰まで伸びた彼女の黒髪を、サラサラと揺らしていく。

「ここで、暮らせばいいんじゃないかつて…思つてな」

竹林の奥にある閑地を指さして、カイリは彼女の肩に触れた。

「どうこうこと…ここに、家を建てるつもり？ ダメよ、材木が要

るわ……それはどうするのよ」

「ここはお前の故郷だしな、ここで暮らすのが一番だと思った。旅暮らしさ、なんだかひどく辛そ'だつたから」

「そんなの、勝手な思い込み！ カイリ、あたしが重荷なの？」  
アヤメの表情に影が差す。

涙を一杯に溜めた瞳は、今にもこぼれ落ちてしまいそう。  
いやいやをして、胸板に縋りつく彼女の温もりがただ、カイリは哀しかつた。

「バカな奴、誰が今すぐ置いていくと言った？」

「言つたじやないの！ ここで暮らせばいい、お前はつて  
ついに泣き出した彼女がじれつたくて、カイリはアヤメの唇を塞いだ。

指で。

「ん、むり……むり…」

「しばらぐは一緒にいてやるよ、けど…俺にも用事があつて、じきに傍にいてやれなくなる」

「よ、用事つてなに？」

さつと、アヤメの顔が青ざめる。

「まあ色々だ、色々」

「女人の人…ね？」

カイリの口調に浮いた物を感じたのか、アヤメは面白げに口角をあげる。

「母だがな」

「なあんだ、がっかり」

「お前、なに期待してたんだよ」

のへー…と呆れ顔をするカイリに、アヤメはただ、楽しげに笑うだけだった。

竹林の奥には、桜の大木がある。

その傍で、カイリは地面に家の間取りを図画していた。

「なにやつてんのよ、なにこれ……間取りなんか描いたりして」

「まあ見てる、すぐ済む」

「きやつ……」

大地が、ひとしきり大きく脈打った感じに驚いて、アヤメはその場

に立ち竦む。

「建・除・満・平・定

」

耳慣れぬ言葉を紡ぐ彼は、青白く明滅を繰り返している。

アヤメはあまりの驚きに、息をするのも忘れていた。

みるみるうちに、その場に和風家屋が現れ、明かりが点る。

「今日からの住処だ。お前の家だよ」

「スゴ……イ、本当にスゴイ！ ありがとう、カイリっ」

じゅれつく彼女を避けながら、カイリはふと遠い目をした。

「やだ雨！？ カイリ、濡れちゃうわよーって、ああ平気なんだっけ」

カイリは、雨の中じこか虚ろに真白い空を見あげ、小さく溜息する。

彼女の想いが直らにあることを、カイリは理解していた。

だが、どうすることもできない。

その想いに、応えてやることができるないのだ。

「カイリ、早く中入るひつよー」

呼ぶ声をえも、浅く自身を斬りつけていく。

「ああ、今行く

これは夢だ。

雨の向ひに見る夢は、泡沫のじりべ。

雨が止めば消えてしまつ、夢でしかないのだ。

「これ、持つとけよ」

「なあに？　きれいな石……」

彼が懐から取り出したのは、空色の勾玉だった。

アヤメはそれを光に透かしたりしながら、色味を楽しんでいた。

「俺の鱗だ。寂しいときは、それを握ればいい。片割れだし、俺とも繋がってる」

「カイリ？！　イヤだよ……イヤ」

アヤメは、精一杯の力を込めてカイリの背に掻きつぶ。

「あたしだけ置き去りなんて……ヒドイよ」

「いや、置いてく訳じゃない……お前はここで生きるんだ」

「いつも一緒だったつ……一緒にいてくれたのに、どうして！？」

切なく訴える彼女を、カイリはついに抱きすぐめた。

「……カイリ……」

「人の子よ……これ以上に踏み込んだはならぬよ。闇に魂を喰われてしまふ、だからお前には……ここで生きて欲しい」

「……そんな」

雨が、止んだのだ。

「分かつてくれ、アヤメ」

アヤメの頬を、いくつもいくつも涙が伝い散る。

「ねえ、カイリ……最後に、魔法をちょうどい？」

涙伝う頬を拭つて見あげる彼女に、カイリは静かに頷いた。

「お願いよ……」

ゆつくりと、魔術師が触れ合いつ。

「愛してる……愛してるから、もう、泣くなよ

「うん、うん……」

雨音が、耳をつく。

静閑な空間を、ただそれだけが彩っていた。

「そろそろ、切れる頃だろうねえ……あたしも、やつと休める」

「アヤメ……悪かつたな、一人にして」

「いいや、いいんだよ……あんたが謝る事じゃないさ」

布団に横たわるアヤメは、皺くぢやな類を綻ばせて、深く息を吐いた。

「約束、ちゃんと憶えてるぜ」

「ああ……そうだねえ、やつと叶うんだ。この老いた体を棄てて、自由になれ……る」

「アヤメ、アヤメ？……眠ったのか？」

应えは、ない。

その代わりに、老いた彼女から『あの日』のアヤメが抜け出した。

「カイリ、言つて？」

「アヤメ……お前は」

果たして……。

お前は、俺といて幸せだったのか？

「あなたと過ごした時間、忘れないわ。幸せだったのよ？」  
「本当に？」

「嘘なんかつくもんですか……もう、あまりここにはいられないから。お願い、言つて？」

ふわり、と宙を舞つたアヤメに、カイリは目頭が熱くなるのを感じた。

「俺も愛してる……絶対にお前を忘れないから」

「あらあ、嬉しい」

くすぐつたそぞろ、アヤメは『またね』と笑つ。

「……ああ……」

そして、消えていった。

カイリの頬を、止めどなく涙が伝いおちていく。

冷たい雨に終わる恋物語

。

切ない恋の物語は、結ばれなかつたからじゃ……

いつまでも、輝き続けるのかも知れない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4785a/>

---

あわい

2010年10月11日11時36分発行